

# Career Cruising

キャリア・クルージング

キャリアとは「旅」である。人は誰もが人生という名の旅をする。  
人の数だけ旅があるが、いい旅には共通する何かがある。その何かを探すため、  
各界で活躍する「よき旅人」たちが辿ってきた航路を論考する。



内なる「衝動」を昇華させ、  
社会につなげていく

**渡辺 謙氏** Watanabe Ken

俳優

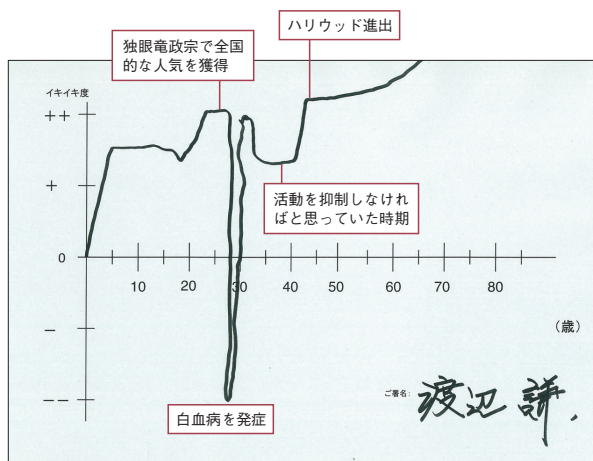
## Career History

### 渡辺謙氏の キャリアストーリー

1959年	0歳	新潟県北魚沼郡で教師の家庭に生まれる。中学時代からトランペットを吹き始め、音楽大学への進学を目指した時期もあった
1979年	20歳	芥川比呂志演出による演劇集団「円」の公演『夜叉ヶ池』に感銘を受け、同劇団付属研究所入所。アルバイト先の居酒屋で知り合った作家・猪俣公章氏の紹介で蜷川幸雄氏演出の舞台オーディションを受けて合格し、舞台デビュー
1984年	25歳	『瀬戸内少年野球団』で映画デビュー後、次々と映画に出演。NHK朝の連続テレビ小説『はね駒』(1986年)などテレビドラマでも活躍する
1987年	28歳	NHK大河ドラマ『独眼竜政宗』で主役を演じ、人気を不動のものとする
1989年	30歳	急性骨髄性白血病を発症。約1年の治療後、復帰
1993年	34歳	NHK大河ドラマ『炎立つ』で再び主演を務めるが、翌年、病気が再発。約2年の治療後、復帰
2003年	44歳	国外映画初出演作『ラストサムライ』公開。アカデミー賞助演男優賞などにノミネートされる
2006年	47歳	日本映画『明日の記憶』で映画初主演。同作では初めてプロデューサーも務めた。同年、ハリウッド映画『硫黄島からの手紙』でも初主演を果たす



2012年2月11日公開の映画『はやぶさ—遙かなる帰還—』では、主役を演じるとともに、プロジェクトマネージャーも兼任した



直筆の人生グラフ。幸福度は発病した29歳で底を打ち、その後は再発、休養を経つても常にプラス。「かなり楽観的な性格なんです」と渡辺氏。

トランペッターに憧れて音楽大学への進学を志したが、経済的な事情から断念。将来を模索していたときに、たまたま観た舞台に感動して演劇の道に進んだ渡辺謙氏。

「『やってみよう』という衝動だけで劇団の研究所に入り、目の前の芝居のことだけを考えていました。今もロジカルには生きていませんし、俳優の仕事というのは相撲取りのように体をぶつけなければわからないところがあります。とはいえ、20代前半の僕はまわしもつげず、素っ裸。もう、原始人みたいなものでした」

### 名優との共演を通し、 自分の未熟さに気づいた

20歳で蜷川幸雄氏演出の舞台の主役に抜擢され、デビュー。20代半ばには映画やテレビドラマに次々と出演するようになった。素朴に「何かを表現したい」という思いだけで疾走していた渡辺氏が、俳優の仕事の意味を探しはじめたのはそのころからだ。

「当時の自分なりにではありますが、ある程度の経験をさせてもらって、少し足元を見つめる余裕ができたんでしょうね。体当たりで芝居をしてきて、日々は充実しているけれど、これを一生続けていいのだろうか。走り続けながらも、そんな問いが頭の片隅にありました」

ターニングポイントとなったのは、27歳で主演を務めたNHK大河ドラマ『独眼竜政宗』だ。同作は大河ドラマ史上最高の平均視聴率を記録し、渡辺氏の人気を不動のものとしたが、大役を担う重圧も大きかった。

「勝新太郎さんや北大路欣也さんなど名だたる俳優さんたちと共演させていただいて、自分の未熟さに気づいてしまった。それで、このままではいけないと思ったんですね。もう1回、勝さんと北大路さんと勝負しなければ。そのためには、漫然と俳優を続けるのではなく、彼らに再びぶつかっていくだけの力を備えられるよう自分を鍛えていかなければいけない。俳優を仕事にするというのはそういうことなのだ学び、これはやらなければいけない、俳優として生きるしかないと思いました」

### 40代を機に過去のスタイルを捨て、 自らに「新エンジン」を搭載

大作映画『天と地と』の主役に抜擢され、さらなる飛躍を遂げようとしていた29歳のとき、急性骨髄性白血病を発症し、映画を降板。約1年後に復帰したものの、

5年後に再発した。約2年間の治療を経て再復帰したが、30代は体調の影響で、長時間のドラマや映画の仕事を断らざるを得ないことも少なからずあった。

「元気になってからも、病気のイメージがいつまでも自分につきまとっている気がしていました。もちろん精一杯走り続けてはいたし、出演した作品もそれなりの評価をいただいていた。でも30代後半に、やっぱり思うようなスピードが出ていないと感じたんです。それが自分のスタイルになってしまうのはまずい。『新しいタイプのエンジンを自分に積まないと、40代の周回を走れない』という思いを強く持ちました」

抱えていた仕事をすべて終わらせ、その後は「作品が面白いかどうか」だけを基準に、悪役などやったことのない役や、敬遠していた役にも積極的に挑戦しはじめた。

その延長線上にあったのが、映画『ラストサムライ』だ。英語は堪能でなかったが、猛勉強。同作での高い評価を足がかりに、ハリウッドの大作に次々と出演が決定した。多くの日本人俳優が挑戦し、クリアできなかった「海外進出」を成し遂げたわけだが、渡辺氏本人は、今はもう国境を意識していない。

『ラストサムライ』のときは自分の力をかき集めて、全部リヤカーにのせて海を渡っていくような気

負いもありました。だけど、ハリウッド2作目の『バットマン ビギンズ』のときにわかったんです。現場にはさまざまな国籍の俳優さんたちがいて、彼らは『アメリカ人』としてではなく、そのままの自分でそこにいる。僕も『ハリウッドアクター』になる必要はまったくないと。そう気づいて楽になりましたし、日本人であることへの誇りも素直に感じました」

## 自らの仕事と

### 社会のつながりを強く意識

国内でも活躍し、46歳のときに公開された『明日の記憶』では映画で初めて主役を務めた。49歳で若年性アルツハイマーを発症したサラリーマンを熱演し、第30回日本アカデミー賞をはじめ多くの映画賞の主演男優賞を受賞している。同作は、渡辺氏が同作の原作に惚

れ込み、自ら映画会社や原作者に働きかけて映画化を実現した映画。エグゼクティブ・プロデューサーも兼任し、資金集めから宣伝まで制作全体に携わった。

「米国で仕事をしてみて、日本の映画界との大きな違いは完成した作品をいかに伝えていくかにあると感じたんです。作品づくりへの情熱は日米ともに同じですが、米国の映画界には、作品を『観客に届ける』という意識が明確にあり、マーケティング戦略も綿密です。その大切さを日本でも具現化して示したいという思いが、『明日の記憶』のプロデュースにつながりました」

2012年公開の映画『はやぶさ一遙かなる帰還』でも小惑星探査機「はやぶさ」のプロジェクトマネージャー・川口淳一郎氏をモデルにした主役を演じる一方、宣伝戦略の提案などプロデュースに携わった。

「40代から日米両方で暮らし、気がかりだったのは、日本人が自信を失っているように見えたこと。世界に認められる技術を持ちながら、日本人自身がそのことに気づいていない。もっと誇りに思っているのにと感じていたところに『はやぶさ』の映画化の話があり、一も二もなく受けました」

外国での仕事が増えたからこそ芽生えた「日本人に向けて何かを伝えたい」という思いが、東北地

方太平洋沖地震以降はより強くなった。

「僕を突き動かすのは今も内なる『衝動』ですが、最近では『作品の面白さ』や『自分のやりたいこと』だけでは走り出さなくなりました。作品を社会にどう位置づけるのかということに意識が向いています。経験を重ねるごとに、社会と深くつながっていく実感があります」

その感覚が強くなるにつれ、仕事との「出会い」を楽しむ余裕も生まれたようだ。

『明日の記憶』を撮り終えたころから、『あんな役がやりたい。その次は……』と点と点を結ぶような『ビジョン』がなくなりました。目標を定めすぎてしまうと、可能性が広がらない気がするんです。だから、今後もあちこちをさまよいたい。50代になっても次にどこでどんな仕事をしているのかわからないという状況が成り立つというのは、幸せなことだと思っています」



## 映画『はやぶさ』で、渡辺謙氏が演じる プロジェクトマネージャーという一人二役

大久保幸夫 ワークス研究所 所長

颯爽とインタビュールームに現れた渡辺謙氏と、最初に名刺交換をした。そこには「はやぶさ一遙かなる帰還 プロジェクトマネージャー 渡辺謙」とある。俳優は普段名刺を持つということはしないが、今回は映画のプロジェクトマネージャーでもあるので、専用の名刺を用意してほしいと彼自身がオーダーしたそうだ。

私には、渡辺氏が「映画のプロジェクトマネージャー」を演じているように感じられた。プロマネとしての役づくりをしてから、私たち取材者と向き合っているような印象である。映画『はやぶさ』の中では、(本誌104号の「成功の本質」\*でも取り上げた)はやぶさプロジェクトのプロジェクトマネージャー＝川口淳一郎役を演じているが、一人二役で、2種類のプロマネを演じているように感じたのだ。

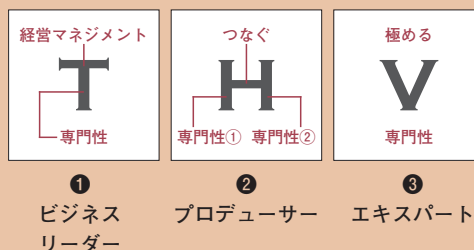
以前に彼が主演した『明日の記憶』(2006年公開)では、エグゼクティブ・プロデューサーの肩書きを使っていた。もともと原作を読んだ彼が映画化の働きかけをして、プロモーションも担当した。「プロデューサーというよりは、インテロデューサー(紹介者)という言葉のほうが事実に近い」と渡辺氏は言うが、俳優という役割を一步超えて映画づくりに関わった最初の機会である。

渡辺氏は日本を代表する俳優だが、その彼が、俳優としての専門性の軸に加えて、映画づくりに関して何かもう1つの関わり方の軸を模索しているのではないか。

彼が敬愛するクリント・イーストウッド氏のように、俳優だけでなく監督もやるという道も1つだが、「監督は決断力が大事な仕事。自分の強みとはちょっと違う気がする」という。彼らしい形の探索が、前回のインテロデューサーであり、今回のプロジェクトマネージャーなのかもしれない。

プロフェッショナルには3つの種類があると思う。専門性に経営マネジメントを掛け合わせたビジネスリーダー(T型)、複数の専門性をつなぐプロデューサー(H型)、1つの専門性を極めるエキスパート(V型)である。彼は俳優としての専門性に、もう1つの専門性を加えて、映画づくりのプロデューサー的存在になっていくのではないだろうか。しかもそれは、俳優として磨いた才能をうまく活用しながら、である。

### プロフェッショナルの3種類



T型：特定分野の専門性と経営マネジメントを掛け合わせる  
H型：異なる専門性を持ち、それを接続する  
V型：1つの専門性をとことん深めることで、応用できるようになり間口が広がる

\*本誌104号の「成功の本質」は、<http://www.works-i.com/works/>よりPDFをダウンロードすることで読みいただけます。